

古書古人(7)

明治12年刊

『<sup>伊分</sup>西洋人名字引』

について

石山 洋

「ミル (ジョン, スチュアルト) ハ英国近代ノ大学士ナリ千八百六年五月二十日<sup>ロンドン</sup>倫敦ニ生ル初メ家庭ニ在テ教育ヲ受ク千八百二十年<sup>仏国</sup>仏国ニ遊ヒ止マル事歳余ニシテ大ニ<sup>仏語</sup>仏語ニ通ス時々<sup>学術上</sup>学術上ノ演説ノ席ニ臨メリ其<sup>パリ</sup>巴黎スニ在ルヤ一時<sup>仏国</sup>仏国ノ有名ナル<sup>経済学</sup>経済学士ジョン, バプチスト, セイ氏ノ家ニ寓居シ当時ノ名家輩ト相交遊ス又<sup>仏国</sup>仏国ノ南部ニ遊ブヤ<sup>シェレミ</sup>シェレミ一, ベンサム氏ノ同朋タル<sup>サア</sup>サア<sup>サミ</sup>サミ<sup>ユール</sup>ユール, ベンサム氏ノ家ニ在リタリ而シテ<sup>仏国</sup>仏国ニ在留スル間普ク<sup>同国</sup>同国ノ政論及ビ<sup>文学</sup>文学ニ着意シ大ニ之ニ通ス千八百二十三年<sup>東印度</sup>東印度公司ノ<sup>検査局</sup>検査局ノ書吏ト為ル同三十一年<sup>副検査官</sup>副検査官ニ任ゼラレ同五十六年父ノ職ヲ継テ<sup>検査官</sup>検査官ト為ル公司ノ為メ大ニ功アリ千八百五十八年病ヲ以テ職ヲ辞シ<sup>慰勞</sup>慰勞金ヲ給セラル其<sup>文学</sup>文学ニ従事スルヤ<sup>夙</sup>夙ニ<sup>ウェスト</sup>ウェスト<sup>ミン</sup>ミン<sup>スト</sup>ストル<sup>評論誌</sup>評論誌及ビ以

<sup>ンボルグ</sup>丁堡評論誌ニ許多ノ論説ヲ寄送シ又致知学ヲ著ハシ大ニ其名ヲ知ラル其他ノ著書ニハ<sup>経済書</sup>経済書, <sup>自由之理</sup>自由之理, <sup>利</sup>利<sup>学</sup>学等アリ千八百七十二年死ス

これは本邦最初の西洋人名事典と目される吉田五十穂訳纂『<sup>伊分</sup>西洋人名字引』(吉田氏蔵版 明治12年5月印行 請求記号 26-202)のなかのミル(John Stuart Mill, 1806~1873)に関する記述である<sup>(1)</sup>。「是書ハ専ラ<sup>チャム</sup>ブル氏ノ<sup>智環</sup>智環<sup>総録</sup>総録<sup>(2)</sup>ビートン氏ノ人名字書<sup>(3)</sup>アプレトン氏ノ人名字書<sup>(4)</sup>等ニ就テ之ヲ抄訳ス」という本書は487名の「最モ有名ナル<sup>碩学</sup>碩学<sup>哲士</sup>哲士等ノ事蹟ヲ抄録シ」たもので、たとえば、伊〔イ〕の部では、

イレ子アス	IRENÆUS	解説 3 行
イソップ	ÆSOP	〃 2 行
イソクラテス	ISOCRATES	〃 3 行
イナカス	INACHUS	〃 2 行
イグナシアス	IGNATIUS	〃 3 行
イセアス	ISÆUS	〃 3 行
イスキニース	ÆSCHINES	〃 2 行

の7名を収録し、1行30字数行の解説を加えている。イソップについて言えば、

「イソップハ希臘ノ有名ナル小説家ニシテ紀元前六百年代ノ人ナリ初メ<sup>奴隸</sup>奴隸タリシガ其才学絶倫ナルヲ以テ

終ニ自主ノ人ト為ル」

とある。冒頭のミルの場合は13行、特に長いほうといえよう。

以下、10行以上の解説あるものを掲げると次の21人である。

バイロン (ジョージ, ゴルドン)	11行
ニウトン (サア, イサーク)	10行
ベンザム (ジュレミー)	10行
ペートル (アレキシオウイツ)	22行
リンコン (アブラハム)	17行
ネルソン (ホレーシオ)	10行
ナポレオン (ボナパルト)	39行
ウェルズレ (アルサル・デューク クオフ・ウェルリントン)	12行
クロムウェル (オリブァー)	16行
グーテンベルグ (ジョン)	11行
マルボロー (ジョン・チョルチ ル, デューク, オフ)	23行
マコーレー (トーマス, ベービ ングトン, ロルド)	15行
アルフレット, ゼ, グレート	25行
アルキサンドル, ゼ, グレート	16行
ギーゾー (フランソワー, ビー アル, ギョーム)	22行
メンデルソン (フェリクス, バ ルソルダー)	13行
ミル (ジョン, スチュアート)	13行
シェークスピア (ウィリヤム)	12行
ジョンソン (サミュエル)	13行
ピット (ウィリヤム)	10行
スペンセル (ヘルベルト)	30行

こうしてみると、英雄や政治家11人に

対し、学者・文化人10となり、本書の趣旨が通例の高名な人を収載したというよりは編者の「碩学哲士」に比重がかかっていることを示している。

著者の好みもあろうが、ナポレオンは別格としても、スペンサー(Herbert Spencer, 1820~1903)の人氣が明治10年当時、高かったことを明示しており、天賦人權思想から進化論哲学への転機を立証するものといえようか<sup>(5)</sup>。

「(前略)千八百四十一年其職〔工學師ムールソム氏書記〕ヲ辭シ家ニ在ル事凡ソ二年間或ハ植物學ヲ修メ或ハ骨相學ヲ學ビ或ハ活字器械時計等ノ製法ヲ改良スル事ニ従事ス千八百四十三年倫敦ニ遊ビ居ル事兩三月ニシテデルビーニ歸ル又專ラ器械創製ノ事ニ潛心シ發明スル所アリ千八百四十八年ソーシャル, スタチックスノ著述ニ着手シ同五十年其稿ヲ脱ス其際エコノミスト新聞ノ副編輯長タリ千八百五十五年ゼ, プリンシプルス, オフ, サイコロジヤ出版シ其後教育論等ヲ著述ス千八百六十年其理學全說ノ著述ヲ始ムルヤ健康甚タ衰ヘタルヲ以テ其身體ニ害アラン事ヲ慮ル者ナキニ非ズト雖モ自ラ深く顧ミテ其氣力ヲ用フル事ヲ節減シ千八百五十九年以來人ヲ備フテ其說ヲ筆受セシムル法ヲ採用シタレバ大ニ其勞力ヲ省キテ今日尚ホ能ク其大業ニ従事ス」

生存中の人物がスペンサーだけであることも注目される<sup>(6)</sup>。

原資料のゆえもあって、イギリス中心に書かれている事も指摘しなければなるまい。シェクスピア12行に対し、ゴエテ（ジョン、ウォルフガン、ジョン）は7行、かえってシルレル（ジョン、フレデリッキ、クリストフェル）が9行、ラベレー（フランス）5行、モリエー（ジョン、バプチスト、ポクーラン、ド）は6行、ダンテ（アリギェリー）5行、セルフアンテスが4行、科学者ニウトン10行に対し、ケプレル3行、コペルニカス5行、ガリレオ6行、ウーレル Euler 4行、レープニッツ6行、リンナウス8行となっている。音楽家がベートーヴェン5行、モーザルト4行で、メンデルズゾンの13行は多すぎる気がする。上記3名以外他にバッハ、シューベルト、ショパン等の音楽家の名は1人もない。

人物の選び方については、冒頭に掲げたミルの周辺をあたってみよう。彼の父（James Mill）、オースチン兄弟（John Austin と Charles A.）、リカルド（David Ricardo）、カーライル（Thomas Carlyle）、コールリッジ（Samuel T. Coleridge）等いずれも記載なく、ベンザム（ジョレミー）10行、ハミルトン（サア、ウィリヤム）8行、セイ（ジョン、バプチスト）3行ぐらいにとどまる。

最後に付け加えるなら、本書は549項目の番号付けがなされているうち、62項目は人名の参照項目で、「凡例」に

「編中載スル所ノ人名ハ専ラ英音ニ基キ彼ノ語音字書中最モ正確ナル者ニ拠テ之ガ音訳ヲ付スト雖ドモ例ヘバ Lincoln ハリンコント発音スベキヲリンコルント発音スルガ如キ正シカラズト雖トモ久シク邦人ノ目ニ熟スル者アリ又 Napoleon Bonaparte ノ如キ或ハ単ニ其姓ヲ称シテナポレオント云ヒ或ハ単ニ姓ヲ称シテボナパルテト云フ事アリ又 Wellesley Arthur Duke of Wellington ノ如キ其姓ウエルスレーヲ称スル事稀ニシテ多クハ其爵号ニ依リウエリングトン候ト称スル事アリ此ノ如キ類ハ総テ之ヲ重出シ以テ覽者ノ搜索ニ便ニス又 Buckle ノ如キハ編中之ヲバツクルト訳シタレドモ人或ハ之ヲボックルト訳シ Laud ノ如キハ之ヲロードト訳シタレドモ人或ハ之ヲラウドト訳スル者アリ其孰レガ是ナルヲ弁ジ難シ此類甚タ多シ今一々之ヲ重出スルニ違アラズ故ニ他書中ボックルノ名ニ逢ヒ之ヲ其首字〔保〕部ニ索メテ得ザレバ〔波〕部ニ索メ又ラウドノ如キ之ヲ〔良〕部ニ索メテ得ザレバ〔呂〕部ニ索ムベシ自余相通ノ音皆此ニ倣ヘ」

と注意を与えている。若干例を示す。発音に由来するもの

バッフォン(コウント、ド) BUFFON

Count De ブーフォン ヲ看ヨ

ドレーキ DRAKE Sir Francis

ヅレーキ ヲ看ヨ

カーサル(ジュリュース) CÆSAR

Julius ジュリユース, セーサル ヲ看ヨ  
 グーテ GOETHE John Wolfgang Von ゴエテ (ジョン, ウォルフガン, ブォン) ヲ看ヨ  
 フランス語の特性によるもの  
 ダランベルト D'ALEMBERT John Le Rond アラムベル (ジョン, ル, ロンド, ド) ヲ看ヨ  
 ジーン, ダルク JENNE D'ARC ジョアン, オフ, アルク  
 JOAN OF ARC ヲ看ヨ

称号と姓名間の参照

ピーター大帝 PETER The GREAT ペートル (アレキソウィツ) Peter Alexiowitz ヲ看ヨ  
 スコット SCOTT John エルドン (ジョン, スコット, イール, オフ) ELDON John Scott Earl of ヲ看ヨ

名と姓の順序関係については、「凡例」の中で,

「泰西諸国人ヲ称スルニ名ヲ先ニシテ姓ヲ後ニス例ヘバジョージ, ワシントン イザーク, ニウトンノ如シ是書専ラ姓ニ由テ順ヲ立テ下ニ( )ヲ設ケテ其名ヲ挿入ス」

とことわっているが,

アダム, スミス スミス (アダム) ヲ看ヨ

と参照を入れている。

英書に従っているとはいえ, わが国に新しい辞典編集の技法を導入する機会となっている面もあったのではなか

ろうか。

なお, 本書は翌13年7月改題して『西哲小伝』(請求記号 特213-38)として再刊された<sup>(7)</sup>。編訳者について, 本書の奥付にある「石川県士族, 東京牛込区牛込北町三十番地」在住というほか, 不詳なのが遺憾である。

編訳者について, 経歴や他の業績をどなたかご教示頂ければ幸いである。  
 注

- (1) 堀経夫「明治初期の思想に及ぼした J.S.ミルの影響」(堀経夫編『ミル研究』1960 所収)には明治前期の関係書が紹介されているが; この記事は未収。
- (2) “Chambers’s Encyclopaedia: A dictionary of universal knowledge for the people”. London, W. & R. Chambers, 1868. 10 vols. [請求記号 70-3]
- (3) “Appleton’s Cyclopaedia of biography: Embracing a series of original memories of the most distinguished persons of all times, written for the work by Sir Archibald Alison [and others]. Revised American edition edited by Francis L. Hawks.” New York, D.Appleton, 1872. 6,1058 p. [請求記号 69-63]
- (4) “Beeton’s Dictionary of universal biography, being the lives of eminent persons of all times. With the pronunciation of every name. 2nd ed.” London, Ward, Lock and Tyler, 1870. iv, 117 p.” [請求記号 65-36]
- (5) 宮川透『近代日本の哲学』(1961) p.55 以下において, 明治10年, 東京大学創設が「ベンサム, ミルの受容からスペンサーの受容への移行」と説く。『西洋人名索引』は「明治11年11月11日版權免許」となっている。
- (6) スペンサーの記事はアップレトンやビートンの辞典にはなく, チェンバー百科の第10巻に補遺として収められた記事 p.739~740 を基礎としている。
- (7) 本文は全く変わらず, 誤植・正誤表もそのまま, 単なる改題に終始している。

(いしやま・ひろし  
 整理部分類課長補佐)